

ぼくのくうちゃん

奄美市立屋仁小学校 一年 ゆみば けいと

ぼくは、けいと。一ねんせい。うみであそぶのが大
き。やにのうみの目のまえにすんでいるんだ。

いつものようにうみであそんでいたら、大きなムラサ
キオカヤドカリをみつけた。ヤドカリなんてそんなにめ
ずらしくないけれど、そいつは、あまりにも大きいので、
いえでかうことにした。とつてもくいしんぼうなので、
なまえは「くうちゃん」。

くうちゃんは、なんでもよくたべる。ニンジンやにぼ
し、りんごにぶどう。「これ、たべるかなあ。」とおもっ
てあげたものぜんぶが、すぐになくなった。おとうさん
が、

「このしよくよくだと、まだまだ大きくなるかもな。い
ろもきれいなむらさきになりそうだ。」

といった。どれくらい大きくなるだろう。どんなむら
さきいろになるんだろう。ぼくは、くうちゃんにどんど
んたべものをあげて、たのしみにおせわをした。

ところが、なつやすみになると

「ながいおでかけにいくから、あしたまでにくうちゃん
をにがしてね。」

とおかあさんにいわれた。かぞくでかごしまのおばあち
ゃんのいえにいくからだ。ぼくは、はなれたくなかった
けど、いつしよにつれていけないんだって。だから、ぼ
くは、がっこうのガジュマルの木へにがすことにした。
おとうさんが、ヤドカリは、ガジュマルのはっぱもたべ
るっておしえてくれたから。でも、このはっぱ、ほん
とおいしいのかな。ぼくは、はっぱを一まいとつて、
ためしにちよつとかじつてみた。

「うわ、にがい、まずい。」

おもわず、ぺつとはきだしたとき、びっくりした。ぼく
のてが、ハサミみたいになっていた。そして、あしがほ
そくてなんぼんにもふえていた。ああ、ぼくは、小さな
オカヤドカリになってしまったのだ。

「なんだ、おまえ、しらないやつだな。」

あたまの上から、大きなこえがした。みあげると、大き
なムラサキオカヤドカリだった。

「あつ、くうちゃん。」

ぼくは、うれしくて、ちかよろうとした。すると、くう
ちゃんは、ぼくをにらみつけながらいった。

「ここは、きょうからおれさまのいえになるんだ。さつ
さとでていけ。でていかないと、こいつでちよんぎる
ぞ。」

ハサミが、じゃきんとなった。くうちゃんは、おこつて

いるみたいだった。くうちちゃんって、こんなにらんぼうものだったかな。いや、ちがう。これは、べつのムラサキオカヤドカリかもしれない。そうおもったのに、それは、

「おまえ、うまそうだな。」

とにやりとわらって、じりじりとちかづいてきた。「ああ、こんなにくいしんぼうなのは、やっぱり、くうちちゃんだ。」ぼくは、あわててくうちちゃんにいった。

「ま、まって。はなしをきいて。ぼくは、きみのおせわをしていたけいだよ。にんじんをあげたじゃん。りんごやぶどうもおいしかったでしょ。」

くうちちゃんは、じいつとぼくのかおをみつめた。そして、「そうだ、たしかにけいとくんだ。」

とにっこりわらった。よかった、たべられずにすんだ。

「けいとくん、いつからオカヤドカリになったんだい。」
「さっきだよ。この木のはっぱをかじったら、こうなっちゃった。」

「そうなのかあ、おれが、けいとくんとはなれたくないっておもっていたから、もしかしたらガジュマルが、ねがいをかなえてくれたのかもしれないな。」

くうちちゃんも、ぼくとはなれたくないっておもってくれていたんだ。

それから、ぼくたちは、いっしょにかくれんぼをして

あそんだ。とつてもたのしくて、かえりましようのチャイムがなるまで、あっというまだった。

「もう、かえらなきゃ。ごめんね、くうちちゃん。」

「いいんだよ。この木につれてきてくれて、ありがとな。おれ、けいとくんがかえってくるまで、このガジュマルといっしょにまっているからな。」

「ぼく、ぜったいすぐにかえってくるよ。そして、これから、にんじん、りんごをたくさんあげるよ。」

「わかった、たのしみになっているよ。じゃ、またな。」
くうちちゃんは、ぼくにハサミをむけた。でもこんどは、ぜんぜんこわくなかった。だってくうちちゃんとぼくは、ともだちだもん。ぼくとくうちちゃんはハサミどうしであくしゅをした。そのとたん、ぼくは、にんげんにもどっていた。あしもとには、ムラサキオカヤドカリが一ぴき。

「まってね、くうちちゃん。」
ぼくは、ヤドカリにへんしんするまほうと、にんげんにもどれるまほうをすることができた。だから、いつでもくうちちゃんとたのしくあそべるよ。かえってきたら、こんどは、なにをしてあそぼうかなあ。